HEALTH 春号（通巻第157号）平成29年4月発行 ミサワホーム健康保険組合 〒163-0816 東京都新宿区西新宿2-4-1新宿NSビル ☎03（3349）8359（直通）

こどもの本音をきいてみよう

●著者プロフィール

副島 賢和（そえじま まさかず）

昭和大学大学院保健医療学研究科准教授
昭和大学病院内病弱教育学級担当
学校心理士スーパーバイザー

東京都公立小学校教諭として25年間勤務。内8年間、品川区立清水台小学校「昭和大学病院内さいかち学級」担任。2014年4月より現職。こどもの心を和らげるユニークな授業が注目され、ドラマ『赤鼻のセンセイ』（日本テレビ／09年）のモチーフとなる。『プロフェッショナル仕事の流儀』（NHK総合／11年）にも出演。著作に『あかはなそえじ先生のひとりじゃないよ』（教育ジャーナル選書／15年）、『心が元気になる学校』（プレジデント社／16年）等。

子どもたちの声に耳を傾ける

私たち大人は、子どもの声に耳を傾けるようにと言われることが多くなりました。「子どもの声を聴きなさい」と。教師もそうです。保護者の方もそうかもしれません。

そうすると私たちはついやってしまうことがあります。それは、子どもたちに言語化を求めることです。「言葉で言いなさい」「理由を言いなさい」とつい言いたくなってしまいます。だって、声をきかなくてはいけないのですから。

休み時間にけんかをして教室に戻ってきた子に私は言います。「あなたはなぜあの子を叩いたの？理由を言いなさい。言葉で言えば叩かなくてすみます！」

確かに、子どもたちが自分の考えや気持ちを言葉で言えるようになってほしいと思います。

でもその時子どもたちは、言語化できずに「行動化」をしたのです。「おなかや頭が痛い」と身体化することもあります。

そんな表現をされると、それは大人にとってある意味「ノイズ」です。

『言葉で言って！』と思います。

しかし、その「ノイズ」は、子どもたちが一生懸命に発したサインやシグナルです。その向こうには必ず「メッセージ」があります。「それは認められません」というメッセージももちろんありますが、「子どもがどんなメッセージを伝えたいのか」を受け取ることが、本当に「子どもの声に耳を傾ける」ことなのかも知れません。

子どもの矛盾した表現

『**べつに**』というときは、
「自分の気持ちがよくわからないとき」
「今の気持ちにぴったりの言葉を持っていないとき」

『**なんでもない**』というときは、
「今は、少し放っておいてほしいとき」
「先生のかかわりがあっていないとき」（ショックでしたが…）

『**だいじょうぶ**』というときは、
「自分でやってみたいから手を出さないで」
「その話題にはふれないでほしいとき」（よい子がよく言います）

子どもたちが教えてくれました。

大人が傷つかないように、気を遣ってくれているのだなと思いました。

子どもに本音を伝えてもらうことは簡単ではないようです。知っている言葉の数も大人より少ないのですし、そこにたどりつくには時間がかかるので、当然です。

私たち大人は、子どもたちから話をきこうとするときに、すでに答えを用意していることがあるように思います。それでは、話を聞いているようで、本当には聞くことができていません。そんな大人に、本当の気持ちを伝えることをあきらめてしまっている子どもたちもいます。

私たち大人が、誰かと本音を上手に伝え合うモデルを子どもに見せられるとよいですね。